

学校現場における教育相談の実際 第2報
—中学校教員の現状と課題—

齋藤 美枝 笠井 孝久
(山武市立山武中学校) (千葉大学教育学部)

Practice of educational consultation in school field

SAITO Mie KASAI Takahisa

千葉大学教育実践研究

第27号 令和6年3月

Research in Teaching Strategies and Learning Activities:

**A Bulletin of the Center for Research and Development
In Teacher Education Faculty of Education, Chiba University**

No.27 March 2024

学校現場における教育相談の実際 第2報

—中学校教員の現状と課題—

齋藤 美枝 笠井 孝久
 (山武市立山武中学校) (千葉大学教育学部)

Practice of educational consultation in school field

SAITO Mie KASAI Takahisa

本稿では、中学校における教育相談の現状と課題について、中学校教員6名への聞き取り調査と教育相談に関する校内研修を受講した中学校教員の変容等、学校現場における教育相談の実際について考察した。

キーワード：教員 教育相談についての困難さ 研修

Key Words：teachers, Difficulties in educational counseling, Training

1 問題と目的

中学校学習指導要領解説（特別活動編）によれば、「教育相談は、一人一人の生徒の教育上の問題について、本人又はその親などに、その望ましい在り方を助言することである。その方法としては、1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師があらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かし、教育的配慮をすることが大切である。」とされている。令和4年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（以下、「問題行動調査」）によると、いじめの認知件数は681,948件、暴力行為の発生件数は95,426件、長期欠席の内小中学校における不登校児童生徒数は299,048人であり、不登校児童生徒数は10年連続で増加した。さらに、小・中・高等学校から報告のあった自殺した児童生徒数は411人と過去最多であった令和2年度より令和3年度に

は減少したものの、令和4年度は増加となり、依然として極めて憂慮すべき状況にある。

600人の中学生を対象とした2023年10月調査の「中学生の日常生活・学習に関する調査」によれば、不安や悩みがあるときでも相談しない中学生の割合は9%、相談相手で最も多いのが母親で67%、次いで友達が46%、学校の先生と答えたのは10.3%だった。

学校では、教育相談週間等を年間の教育計画に位置づけ、定期的な生徒へのアンケート等を行い、生徒のSOSに速やかに対応するための手立てを講じているが、教育相談というと、向かい合って面談を行うことだという認識や、そもそも教育相談とは何なのかという疑問を抱きながら、生徒とかかわっている教員の姿もあるように思う。

毎日、様々な課題に取り組む教員が、教育相談をどのように捉え、向き合っているのかについて、また、教育相談に関することについて、

どのように学んでいきたいと考えているのか、中学校教員を対象に、その実際について考察する。

現在は、生徒指導主任
これまで学年主任を8年、生徒指導主任を10年経験

2 方法

【調査方法】

次にあげる2種類の調査を行った。

1 中学校教員への個別調査

中学校の現職教員6名に、教育相談の捉え方や教育相談を行う上で困っていること等について、アンケートへの記述と個別の聞き取りを行った。質問項目については、同じ内容について6名の教員へ質問した。

2 中学校における校内研修の実際

教育相談についての校内研修を実施した中学校の教員を対象に、受講後の個人の変容等についてアンケートを行った。

②調査時期

令和5年12月

③聞き取り内容について

ア 「教育相談をどのようにとらえているか。」

	回 答
A	・生徒理解の場面 ・生徒の様々な悩みや不安に少しでも寄り添う場面
B	・生徒が困っていることや悩みを聴ける場面
C	・日常生活では捉えられない生徒の感情や考えていることを知る機会
D	・生徒理解の場
E	・日常のかかわり
F	・特別なものではなく、普段のかかわり

3 結果

(1)中学校教諭6名への調査について

①調査対象

千葉県内の中学校に勤務する現職教員6名。

【内訳】

A：経験年数2年目

※初任校 現在は担任

B：経験年数3年目

※初任校 現在は担任

C：経験年数21年目

※現在の勤務校は6校目

現在、担任（学級担任は21年経験）

D：経験年数26年目

※現在の勤務校は7校目

現在は教務主任

（学級担任は20年経験）

E：経験年数26年目

※現在の勤務校は6校目

現在は学年主任

（学級担任は19年経験）

F：経験年数36年目

※現在の勤務校は7校目

イ 「教育相談を行う上で困っている（困ったこと）」

	回 答
A	・時間が確保できず、一人一人の現状把握や悩みについて話を聴けないこと。
B	・教育相談の場面で話してもらえず、後になってから問題が発覚すること。
C	・生徒の話をうまく聴きだせない。 ・こちらの質問に生徒が答えるだけで、教育相談の目的を担任として十分に果たしていないと感じる。
E	・教育相談の場面で自分の思いが先行してしまうこと。 ・担任とのスタンスの違い。 ・どこまで受容していいのかわからない。
D	・教育相談とは根本的にどういうものなのか。 ・相談の場面の進め方が、この方法でいいのかわからない。
F	・若い頃は、指示的なかかわりをしなくてはならない担任としての場面と受容的な対応を求められるバランスのとり方。 ・保護者とのかかわりで感じる無力感 ・職員間の意思疎通の難しさ（担任間の生徒理解の温度差） ・教育相談週間の時間の確保 ・教員の教育相談への理解度の低さ

ウ 「これまでの教育相談に関する研修の受講の有無と受講後の自身の変容」

	回 答
A	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチング（初任時） ・不登校児童生徒への対応と教育相談 ※2年目に希望して受講 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員から生徒へ声をかけることの大切さ ・生徒の気持ちを受け止めることの大切さ ・関係機関との連携の大切さ
B	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチング（初任時） ・話の聴き方 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>相談は生徒主体であること</p>
C	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談に関する基礎研修 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>相手の意見を容認し、指導にならないように相談を行うこと。</p>
D	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談に関する中級研修 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>受講した内容を意識して、活かそうとした。</p>
E	<ul style="list-style-type: none"> ・ない
F	<ul style="list-style-type: none"> ・グループエンカウンター ・事例研究の研修 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手さぐりで教育相談を行うことの怖さ ・生徒の気持ちを聴く姿勢の変化 ・生徒が話しやすい教師を目指した。

エ 学校現場で教育相談について身につけられたこと

	回 答
A	受容の姿勢を大切にして生徒と接したところ、生徒がたくさん話してくれるようになった。
B	話の聴き方や話の受け止め方
C	指導する場面と区別した生徒の話聴く姿勢
D	生徒の話をきちんと聴くこと
E	生徒との何気ない会話の大切さと生徒への声のかけ方
F	生徒の話の聴き方や話し方

オ 今後、教育相談にかかわることで身に着けたい力

	回 答
A	教育相談の場面で用いるカウンセリングのスキル
B	話の聴き方
C	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が話したいと思う雰囲気づくり ・生徒が話しやすくなるような話題提供のスキル
D	傾聴のスキル
E	生徒が困っている時に助けられるスキル
F	校内におけるコーディネート方法

(2) 中学校における校内研修の実際

ア 調査校の概要

千葉県内の中学校 1校

生徒数 120人

学級数 7学級

(特別支援学級2学級を含む。)

教職員数 25名

イ 調査時期

令和6年1月

ウ 校内研修の実施について

①研修実施に至る経緯

【研究主任への聞き取りから】

不登校生徒への対応等について考える際に、職員が「そもそも教育相談とは何か」ということを整理できていないと感じる。ここ数年、教育相談に関する研修は実施しておらず、今回、職員からの要望もあり、研修の機会をつくりたいと考えた。

②研修の内容について

研究主任の意向を踏まえ、講師と研究主任が一緒に考えた。

【内容】

講話 (45分)

- ・教育相談とは
- ・生徒との信頼関係を構築するための聴き方と伝え方

事例検討 (45分)

事例提供者や運営担当者等の負担軽減と学年会等でも実施可能な「インシデ

ントプロセス法」を用いた事例検討を行った。

〈事例対象〉

不登校事例

中学校2年生の女子生徒について

③研修時間

90分

④参加人数

15名

参加者の経験年数については5つの経験年数区分で表1に示す。

表1 参加者の経験別人数

経験年数	人数
3年未満	1
4年～7年	3
8年～10年	4
10年～20年	3
20年以上	4

⑤受講後の変容について

回答した11名の内、10名が教育相談についての捉え方が変わったと回答した。

【回答内容】

学級担任 経験年数2年

教育相談は個に対して行うものと思っていたが、全職員が担任という意識で生徒とかかわることが大切だと知り、そうしようと強く感じた。

学年主任 経験年数15年

これまでのことを再確認できたことで、より教育相談に関して整理ができた。

教務主任 経験年数37年

取り組もうと考えたことが増えた。

学級担任 経験年数20年

生徒への声掛けの方法や、姿勢などについて気を付けようと思った。

学級担任 経験年数9年

言語以外の部分で生徒へこちらが意図していないメッセージが伝わってしまうため、自分の癖や行動を振り返るきっかけと

なった。

学級担任 経験年数6年

教育相談は全職員によるものだという事。

学年主任 経験年数10年

認めていくことが大切だということ。

学級担任 経験年数10年

ノンバーバルコミュニケーションについて聞き、自分がこれまで生徒へ見せてきた姿が高圧的に見えていたことを理解し、今後に活かそうと思った。

学年主任 経験年数10年

教育相談はただ聴くだけ聞くだけではないこと。言葉による伝え方について知った。

研究主任 経験年数18年

生徒にかかわる全ての教育活動が教育相談だと思ったこと。担任以外は関われないような雰囲気だったので、そうではないと考えが変わった。生徒指導との違いがわかった。

⑥受講後、今後に活かしたいと思うこと

・非言語コミュニケーションでの身体の動きに注意して生徒や保護者とかかわったり話す時は、相手が具体的に話せるように質問したり、相手を否定する言葉は遣わないように気を付けたい。

・思い込みをせず、最後まで話を聴くこと。

・教育相談におけるフィードバック機能について考えたことがなかった。信頼と尊敬を大切にしたい。

・言語以外の見え方、感じ方を考えたい。

・問いかけの方法や、保護者ともチームとして子どもとかかわること。

・直接、生徒や保護者とかかわる教員に対して、もう少し丁寧に、問いかけや背景の捉え方について、踏み込んだ助言をしてもよかったのではないかと反省している。

・傾聴する姿勢をもっと徹底するべき。

・生徒への声のかけ方や話を聴く姿勢等の細かいことにも気を付けていこうと感じた。

・生徒の「見方」の使い分けができるようにしたい。

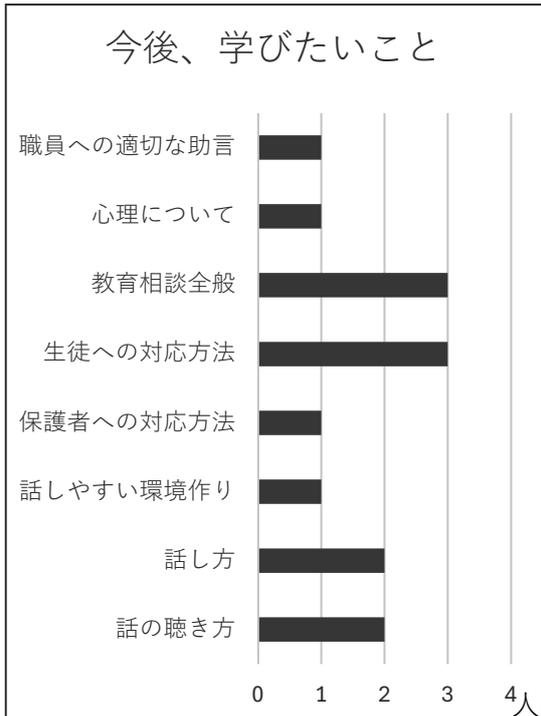
・生徒の「見方」の使い分けができるようにしたい。

・保護者もチームの一員であること。

- ・教育相談のベースは信頼と尊敬であること。
- ・受容と信頼の姿勢が大切だと思ってきたが、その前に相手に対する信頼と尊敬の気持ちがあればいけないと思った。

⑦今後、教育相談について学びたいこと

研修後、受講した全員が、今後も教育相談について学びたいと答えた。



⑧研修10日後の教員集団の変容

【研究主任からの聞き取り】

研修直後は、職員室でノンバーバルコミュニケーションについて話す職員が多かった。10日後には、事例検討の際に、講師が事例提供者へ質問した「眠れているか」という視点を生徒とのかかわりに活かしていこうという意識が高まったことを職員室での教員同士の会話から感じ取った。

4 考察

(1) 教育相談についての認識

今回の聞き取り調査や校内研修に参加した教員のアンケートから、笠井 (2015) が指摘しているように、教員によって教育相談の捉え方には違いがあることがわかった。経験が浅い教員は、生徒理解の機会と捉えながらも、

面談で生徒の悩みを聴く機会という認識が強かった。それ故、教育相談で困っていることに「面談時間の確保の難しさ」や「生徒の話聴けないこと」等を上げ、今後は、「カウンセリング」や「聴き方のスキル」を身に付けたいと答えている。今回、聞き取りを行ったA教諭は、校外で実施した研修に希望し参加し、その後、自ら管理職へ学校で教育相談について学びたいと申し出ている。その理由は、不登校生徒への対応の在り方や生徒理解の方法について知りたいからということで、教育相談への関心や意欲が高いことがわかる。A教諭の申し出を受けた管理職は、この教諭と相談し「オーダーメイド」の研修を進めている。

教育相談の認識の違いについて笠井 (2015) は、「教師の教育相談に対する関心や意欲と関連しているように感じられる。」と述べているが、今回の調査においてもその傾向は見受けられた。今後も引き続き、教育相談の捉え方とその教員の関心や意欲がどのように関連しているかについては、明らかにしていきたい。

(2) 校内研修の意義

研修を受講することによって、これまでの経験や学校現場で培った教育相談に関することについて整理され、自身の学びたい意欲に気づき、学びたいことが焦点化される教員の姿がわかった。とりわけ、校内における事例検討では、参加する教員集団が校内の生徒の実態や課題を把握しやすい点にメリットがある。今回の調査では、管理職を含めた全職員が一つの事例について検討し、手立てを共に考えたことにより、担任の思いを共有できた。このことは、学校組織として「気になる子をみんなが知っている」という意識をもちながらサポートしていこうという体制づくりの一端となったことが窺える。事例検討というと、馴染みのない先生にとっては、取り組みにくい印象をもつかもしいないが、今回用いた「インシデントプロセス」のように、提案者や研修担当者も負担なく行えることを体験することにより、事例検討も身近な生徒理解の手立

てに加えることができるであろう。

令和5年8月に改訂された「千葉県教職員研修体系」には「校内研修が組織的に行われることにより、教職員間での組織目標の共有化とそれに伴う協働が進み、学校の組織力の向上にも大きく寄与する。」と記されている。校内での研修や事例検討は、この点においても意義ある研修の一つと言えるのではないだろうか。

(3) 学びたい教員のサポートの在り方

今回の調査において、教育相談について学びたい教員の姿が明らかとなった。「学びたい気持ち」は教員としての資質能力の向上をはじめ、教員が生徒や保護者に寄り添うために、何か力になりたいという気持ちの表れだと考える。働き方改革が推進される学校現場において、教員の「学びたい気持ち」に応えるべくサポートをどのようにしていくかはさらに、今後検討が必要であると考えます。

千葉県では、千葉県総合教育センターや千葉県子どもと親のサポートセンターが生徒指導や教育相談について悉皆研修や希望研修を実施している。その中には管理職対象の研修も行われており、希望研修については、12種類の研修でおよそ300人余りが受講できるように用意されている。その内容は「千葉県教職員研修体系」の生徒指導等に関する実践的指導力にある各々のステージに応じた研修が実施されている。この他にも、地域等で行われている研修もあると思うが、多忙な教員が学びやすい方法等を含めた環境整備も必要だろう。コロナ禍を経て、オンデマンドの研修が増えたことは、受講のしやすさという点においても、負担軽減に役立っていると思う。

(4) 学校の教育相談力の向上に向けて

今回、調査した学校のように学校では校内

研修の実施に向けて、どの分野においても研究主任が企画や運営の中心となっている。今回の事例検討では、講師がモデルとなるべくファシリテーターを行ったが、教育相談に関してその「核」となる役割を担える人材育成の難しさは学校現場の課題の一つのように思う。笠井（2019）は「管理職が教育相談コーディネーターをどのように位置づけ、どのような役割を任せるのかによってコーディネーターという役割が機能するかに大きな影響を与える。」と述べている。管理職の教育相談への関心の高さが、その配置や学校の教育相談力にどのように関係しているのかについては、今後精査していきたい。

引用・参考文献

- 笠井孝久（2015）教育相談に対しての教師が直面する困難 千葉大学教育学部研究紀要. 第63巻. pp187-197
- 笠井孝久（2019）教育相談コーディネーターの機能と役割 千葉大学教育学部研究紀要. 第67巻. pp67-73
- 春日由美（2018）教師の教育相談に関する困難感および自他意識との関連に関する一研究 南九州大学人間発達研究. 第8巻. pp57-65
- 文部科学省（2010）生徒指導提要
- 文部科学省（2011）中学校学習指導要領（特別活動）
- 千葉県教職員研修体系（2023）千葉県教育委員会
- 中学生白書（2023）学研教育総合研究所
- 文部科学省（2023）生徒指導提要

